「新書研究とポップ」を通した総合的な探究の時間の授業実践と繋がり合う地域の書店・学校・17歳の学び
［副題］
～17歳のポップが伝える新書のぬくもりと地域との協働学習から見えるもの～

［学校・団体名］兵庫県立川西北陵高等学校
［役職・氏名］　　教諭　稲中　優子

1　はじめに～本校の目指す力～

本校は兵庫県川西市に所在し、生徒の90％以上が地元川西市、猪名川町から通学している。豊かな里山に囲まれ、住民は地元愛の強い土地柄で、卒業生がこの地域に残り、地域の豊かな力となっている。

本校は「未来に挑戦する3つの力」の育成を教育目標としている。1つ目はキャリア力、2つ目にグローバル力、最後に表現力である。1つ目のキャリア力は、将来自分の生きる道を切り拓く力のことである。将来の進路をしっかり見極め、多角的な視点から社会人としての力を養っている。2つ目のグローバル力は、本校においては「グローカル力」とも呼ばれ、地球規模の大きなものの見方・考え方を身につけると同時に、それを基盤にコミュニティに発信していける行動力を育てている。最後の表現力は、生徒が深く、豊かな探究に取り組んだうえで、その探究を様々な角度から、様々な人に向けて表現することで豊かな表現の力を育んでいる。

本実践は第2学年担当教員7名が週1回の担当者会議で丁寧に指導内容を組み立て、実践してきた。また、前述した3つの力を複合的に組み合わせ、また、地域に開かれた学校を目指し、地域社会と連携・協働していくことを目指した本校の総合的な探究の時間の半年間の実践の記録である。

2　研究の目的～課題意識～

本実践は、2つの課題意識から実践したものである。1点目は本校で実践されてきた総合的な探究の時間（以下総合探究）Ⅱ「新書研究」において、生徒が実際に書籍に触れ、「17歳のMY新書」の中で得た知識を表現する活動の中で、より深く知識を自分のものにできないかということである。新書を通して専門知識を深め、それを表現することで思考力・判断力・表現力の育成を試みた2021年4月から10月までの実践である。

2点目は総合探究を通して、開かれた学校・教育課程を目指し、「新書研究」をより地域の企業・地域住民と協働できる教育内容を設定できないかと考え課題設定した。その実現のため、地域に根差した書店より協力を得ることで、学校・書店・生徒が繋がり合い、新書を通した豊かな学びの実践となることを目指した。

3　主題設定の理由

(1)現状

本校では2019年度より2年生の総合探究Ⅱの中で、「新書研究」に取り組んでいる。生徒自身が1冊の新書を選び、購入し、授業で読破し、課題研究論文を書いてきた。

新書は様々な分野の専門知識を得る入門書である。生徒が新書に触れ、基礎となる専門知識を持つことで、自己形成や進路選択の一助になることをねらいとして新書に限定し、研究に取り組んできた。

しかしながら、新書で得た知識をもとに研究論文として仕上げると、生徒にとっては内容理解で精一杯となり、理解が表面的になることなどが起因し、どうしても小論文が「感想文」となり、真の課題解決力の育成に繋がらないという現状にあった。また、総合探究の授業が個人の内的な作業となり、総合探究で求められる思考力・判断力・表現力の総合的な育成や、教室の40人の仲間と学習している状況にありながら、互いに関わり合い、話し合いや表現することを通して、課題解決するコミュニケーション力の育成に繋りにくかった面がある。さらに、学びが校内に留まり、校外に発信したり、地域社会と協働したりする方向性がなく、生徒個人の内的な学びのみになっていた。

以上の状況を踏まえ、生徒相互の繋がりや、地域社会との協働によって、学びをさらに広め、さらに深めることが重要だと考え、本実践に取り組むこととした。

(2)ある生徒のエピソード

以上の現状を背景に授業実践を考える中で、ある生徒との会話がきっかけとなり、本実践に取り組む一歩を踏み出すこととなった。

それは、生徒が母親と地域の書店に、新書を購入しに

行ったときのことだ。生徒は母親とともに、最寄りの紀伊國屋書店川西店に出かけた。この本、あの本と母娘で楽しく選んだと話してくれた。その言葉からは、母娘で書店で新書を選ぶ豊かで楽しい時間が伝わってきた。

「若者の活字離れ」が言われるようになって久しい。インターネットでの書籍購入が進み、さらに活字離れ、書籍離れ等により、地域に根付いた書店から足が遠のいているのが現状だ。

本校の総合探究Ⅱ新書研究での取組は、ファーストステップとしては書籍に触れることだったが、前述の生徒のように、書店で書籍を選ぶ時間がさらに前向きに取り組むきっかけとなったと考えている。

(3)紀伊國屋書店川西店との出会い・協働

このエピソードを受け、校内で協議し、地域に根ざす書店として長く川西能勢口に実店舗を持つ紀伊國屋書店川西店に本実践と協働を進めることを決定し、思い切って寺田 瞳店長に本校との協働を提案する機会を得た。

書店としてもこれまで地域との協働を模索する中、他店において様々な地域との協働事例の報告がなされていた。そんな中、当川西店 店長 寺田様は地域の学校と結ぶフェアができないか企画途中であった。そういう状況の中での提案となり、本実践との協働が前進するきっかけを得た。

4 実践内容

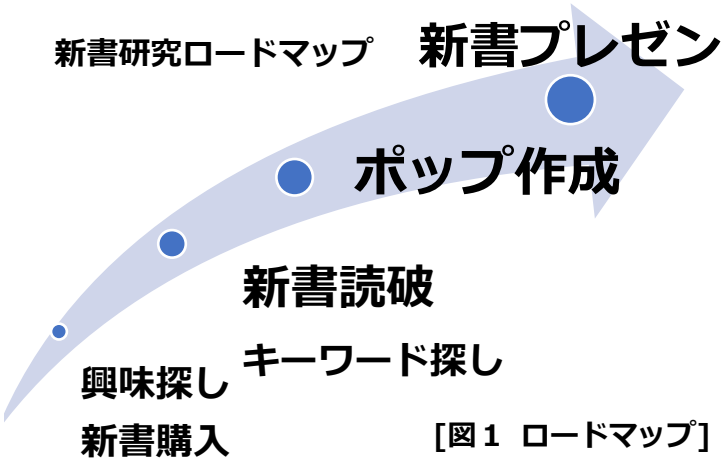
(1)ロードマップ(図1参照)

4月～5月は「新書研究」のねらいを生徒に丁寧に説明し、同時に生徒自身の興味の在処、新書を通じて何を知りたいかという自分探しを行った。

5月～7月は、その自己理解をもとに、生徒は自身で選んだ新書を授業時間に読みながら、キーワードや自分の印象に残る文章を「考察シート」に記入し、読書の足跡を「学びの目印」として残していった。

9月～10月は、「考察シート」をもとに新書ポップを書き上げた。その新書ポップと自分の新書をクラスに見せながら、自分の新書の魅力を話す2分間のプレゼンテーションを最終目標とした。

10月～1月は、優秀作品を「ベストポップ賞」として、新書とともに校内に展示した



[図1 ロードマップ]

(2)4月～5月 自己理解・新書購入(2時間)

4～5月の2時間は、生徒が自分の興味を探し、どんなことに自分の研究対象が向いているか意識し、新書に興味を持つことに主眼を置いた。

そこでまず「自分を知るワークシート」を使って自分の内面を探り、自分の興味の在処を知ったのち、それを「人に話す」インターアクションを取り入れた。インターアクションを通じて「人に話す」ことで、自己理解を深めるというねらいからである。(図2参照)

[図2 自分を知るワークシートとインターアクション風景]

また、週末等を利用し新書を各自で購入することとした。新書の購入に際して図3の資料をもとに「なぜ新書なのか」「新書ポップとは何か」を説明しながら、新書を定義づけた。自分で購入することによって、自分の新書「MY新書」として意識を持つことに繋げた。

［図3 新書の学びシート］

(3)5月～7月 新書研究(6時間)

生徒は、5月の連休明けから自分で購入した新書を読み始めた。生徒が選んだ新書は自分たちの興味・関心によって様々で、大変興味深かった。「ケーキの切れない非行少年たち」や「スマホ脳」(ともに新潮新書)などは生徒が選んだ新書の一例である。

生徒が新書を深く自分のものにするために以下2点を実践した。これは前年度までの積み上げ、また担当してきた教員の助言・サポートのもとに実践することができたことを申し添えておく。

① 「学びの目印」の指導

高校2年生にとって「新書」とは、おそらく初めて出会う自分の専門分野の入門書である。まだまだ小さいながらも芽生えた、自分の興味に対し、「これでいいのかな」とわずかな疑問を持ちながら購入し、チャレンジする初めての「自分の専門学問」である。この新書を、「私はこの本に出会って、人生を決めた」と言えるような読書体験のスタートにしたいと考えた。そこで新書に次の方法で、学びの目印化を図るよう指導した。

[目印化の方法]

・付箋で読み返しページの明確化

・アンダーラインでポイントの見える化

[目印化する点]

・印象に残る文章

・何度も出てくるキーワード

・意味がわからない専門用語

② 新書考察シートへの記入

次に全生徒に冊子「新書考察シート」を配布し、上述の目印化する3点について記入し、忘れず自分のものにするよう指導した。

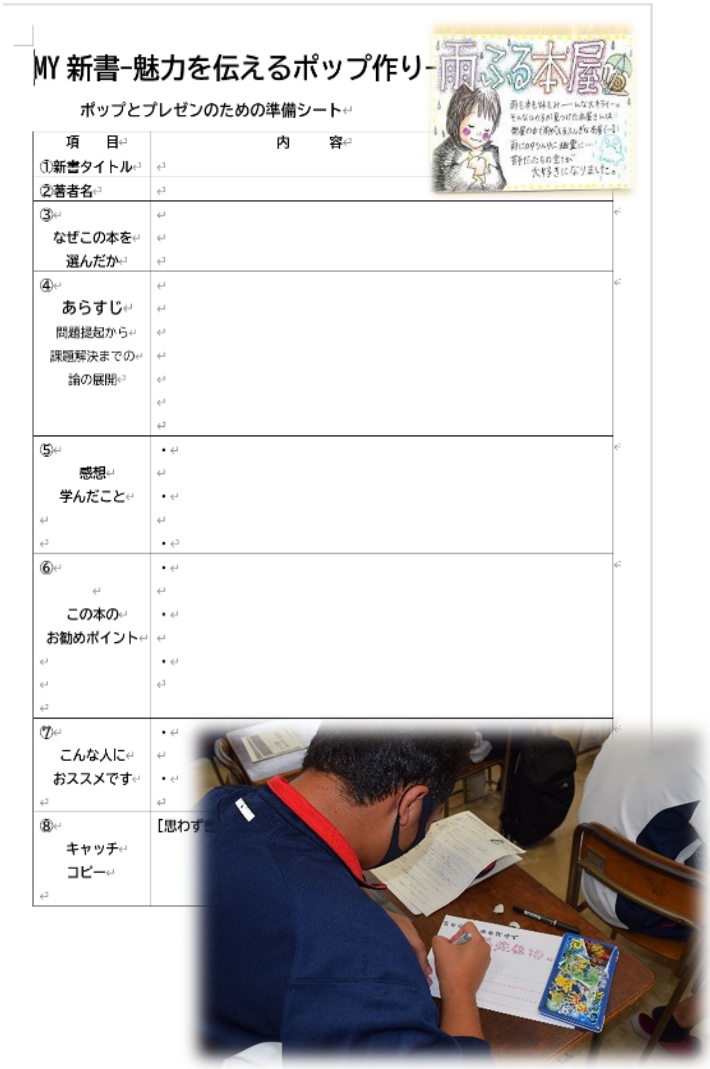
これは新書を自分のものにするというねらいだけでなく、新書ポップ作成時のヒントであることと新書プレゼンテーションで、原稿に必要な言葉集めになることを理解することもねらいであった。

(4)9月～10月 新書ポップ・プレゼン原稿の作成

「新書ポップ」については、担当者ごとにどのようなものにするか意見が分かれたため、事前に担当者会議でどんな項目をポップに盛り込むか議論を重ねた。その結果ポップに盛り込むものは以下のものとした。

・心温まる自分なりの感想
・思わず手に取りたくなるようなあらすじ
・目につくキャッチコピー

またポップ作成・原稿作成がまとめやすいように、図4の「準備シート」にあらかじめポイントをまとめ、何が自分の発表すべきポイントなのかをしっかり確認する作業とした。



［図4 準備シートとポップ作成風景］

(5)ポッププレゼンテーション

9月21日・28日の2回の授業で、ポッププレゼンテーションを実施した。ポップを黒板に投影し、ポップに基づきながら一人2分～2分半、自分の新書の持つ魅力を伝えるプレゼンテーションとなるよう指導した。生徒のポップ、プレゼンテーションともに秀逸なものが多く、うれしい驚きとなった。

また、生徒全員が仲間のポップ、プレゼンテーションをともに評価し、各クラス5作品の優秀ポップをベストポップ賞とし、該当書籍とともに校内に展示した。

[新書ポッププレゼンテーション発表]

(6)紀伊國屋書店川西店とのコラボ

ベストポップ賞は10月～1月まで展示を実施し、その後この実践の校外との結びつきをどのように行ったらよいか、様々な取組の案を考える中で、前述の女生徒との会話を契機とし、紀伊國屋書店で生徒のポップ34作品を該当新書とともに展示させていただけないかというコラボレーション案を3月に企画し提案した。書店より快諾をいただき、本校とのコラボレーションフェアが4月～6月実施された。この取組について神戸新聞(5/8)・毎日新聞(5/13)にて掲載された。

フェアに先立って、書籍の展示には本校生徒2名が1日書店員として、書店員の方と交流しながら設置に協力した。また、フェアは6月で終了しているが、ポップは書店の依頼で寄贈し、以降も店内に展示され、また今後の社員教育に活用を予定しているとのことである。

5 成果と課題

(1)成果

本実践を通じて、学校・企業・地域が互いにwin-winの連携ができたことは大きな成果である。地元書店のお客様が本校生徒のポップを見て、書籍を購入し、生徒の取組が地域や地元企業、また書籍を手にするお客様の読書生活に貢献し、寄与できたことは何よりの成果であった。

[紀伊國屋書店川西店のフェアと1日店員生徒]

さらに、本実践によって生徒の自己有用感が高まったことも成果である。自分の作品を見て、書籍を買った地域の方々がいるという事実は、「やって良かった」「私のポップを見て買ってくれたんだ」という地域社会への貢献を生徒自身が実感できた。

[生徒の感想より]

・普段なら経験できない取組だったし、自分が取り組んでみて初めて感じるポップ作りの奥深さや書店さんでの工夫を知ることができ、貴重な経験でした。

・憧れの書店に自分の書いたポップが展示されたことが本当にうれしい。書店さんにも喜んでもらえて良かった。友達や家族にも褒めてもらえたので、来年は自分たちの代よりもっとすごいものができるはずだ。

(2)課題

今後の課題は本実践の継続性である。総合的な探究の時間の取組には「答え」も「終わり」もない。だからこそ、続けていく難しさを実感している。「北陵スタンダード」として本校独自の実践を継承し、担当者が代わってもさらにバージョンアップしながら継続できるよう、教員間で意識を共有することが今後の課題であると考える。

また、校外との協働をバージョンアップすることも次の課題だ。優秀作品だけでなく、全生徒のポップを校内展示し、実際に書店員の方々にプロの目線で評価していただき、ベストポップ賞を決定するといった書店との協働をさらに深化することも、次の課題である。

6. 終わりに

学校教育において、実践の成功は「チームの連携プレー」次第である。本実践も本校総合探究Ⅱを担当した教員の助言やアイディアあっての実践であり、また実践を支えて下さった紀伊國屋書店川西店さんのご協力なくしては成り立たなかった。すべての皆さまに感謝申し上げたい。